

野宿者支援の底点志向

野田博也

インドにおける路上の底辺

のじれんで活躍している支援者のS氏に紹介してもいい、私は今年8月に渡印した。その大きな目的は、現地・ムンバイのスラム地域などで居住権運動を展開している諸NGO団体から、真に当事者が主体となった活動を学ぶことであったものの、最大の関心はむしろ別のところにあった。それは、その活動ではカバーしきれない陰の部分についてだ。換言すれば、支援活動から漏れている人の生活問題であり、私はそこに精神障害が潜んでいるのではないかと仮定していたのだ。

インドの社会福祉政策は、州ごとに大きな格差があるのだから一概には言えないだろうが、あるNGOのリーダー曰く、インドの精神障害者は(1)スラム地域等でも家族が面倒を見ていることが多く、(2)大規模な施設や病院に収容され、動物のような生活を強いられる者もあり、(3)少数ではあるが住居を持たず、孤独に路上で暮らしている者(主に男性)もいるという。特に(3)の人たちは、日本の野宿者のように、公的な制度からだけではなく、家族や(インドでは)スラム等に根付いているコミュニティの相互扶助というセーフティネットからもこぼれ落ちた状況に置かれている。また「そのような人たちを支援しているNGOを知らない」、「そのような人々への援助はチャリティーのように物を与えることが主となり、組織化を促進することは難しい」と、それぞれのリーダーは答えていた。

スラム住民でもなく、pavement dweller(道路脇の歩道に不安定な住居を構えている人たち)でもない、このようなホーム(人の繋がり)とハウス(住居)がない人の姿は、街中を歩いていると見かけることができる。あくまでも私の経験のみに頼ってその特徴を述べると、服はボロボロ、爪・髪・髭は伸ばしっぱなし、常に1人でいて、痩せている、コミュニケーションを上手くとれない等が挙げられる。

日本における路上の底辺

翻って一気に日本。私は野宿者支援活動に参加してから半年ぐらいいろ経っていないが、それでも上述したような特徴をも

つ日本の野宿者を時々見かけることがある。私の印象では、おそらくそのような人たちは野宿者の中でも少数派であり、さらに彼等との関係を構築することはとても長い時間を要する。そのため、人手も財政的にも余裕がない多くの支援団体は、彼等に対するサポートの必要性を認識してはいるものの、どうしても大多数が直面している課題に焦点を絞って動かなければならず、結果として少数派は看過されてしまうキライがあるようだ。また、路上パトロールに参加していた当事者がそのような少数派を指して「あそこまで落ちたくねえな。あんなったら、終わりだよ。」と言っていたことがあったが、あの言葉は非常に印象深かった。

「社会的」に最も不利な状況に置かれている一群であろう野宿者。その彼等が営む貧困生活の舞台となっている路上の世界でも、当然のごとく発言力・行動力・経済力・思考能力・身体能力などに基づく力関係が存在する。そして、「路上的」に最も不利な状況に置かれている状態(路上での下層に沈没した少数が余儀なくされている心理的・物理的に最悪な生活状態に、「精神障害」または「何からの理由でコミュニケーション(人間関係)が成立しにくい障害」という社会的ハンディが多少なりとも絡んでいる確率が高いのではないだろうか。もちろん、それが全てではないが。

佐々木さん(仮名)への対応をめぐって

私が約3ヶ月前に渋谷で活動をはじめた頃に出会った佐々木さん(仮名)も、これまで述べてきたような少数派の部類に入る野宿者であろう。身繕いや私物の管理にほとんど無頓着であることが原因で、彼はまわりの当事者から痛烈な反感を買っているが、それ以上に、話しかけても答ええない、教えても聞かない等の成立しない対話・コミュニケーションが、「何を考えているのか理解できない(当事者)という不信感を助長し、仲間の疑心暗鬼を招くこととなった。さらには、彼の容姿や行為に対する反感に留まらず、「見るだけでむかつく(当事者)との言葉に象徴されるように、彼の存在そのものに対する嫌悪感にまで繋がってきている。

佐々木さんから派生した諸問題は未だ解決しておらず、彼をめぐる仲間・支援協働の対応に課題は多い。理想的な私見を言えば、当然のことながら彼のような人が抱える問題を看過・排除するような対応は好ましくない。なぜなら、その構造は社会が野宿者を排除している論理と同じ側面を内包しているからである。「排除の連鎖」だけは避けたい。

社会の底辺に位置している野宿者が抱える生活問題が、日本社会におけるセーフティネットの不備・欠陥を露骨に描写して

いるように、路上の底辺に位置している者が抱える生活問題からは、路上における当事者の繋がりや支援者の援助等の潜在的課題が明確に把握できると考えている。その視点を内面化し、常に下から上を見据え、下から全体を批判的に考察していく基本姿勢を貫くことを、私は「野宿者支援の底点志向」と呼びたい。

自分が能力的にも経験的にも未熟であることは承知しているが、これからもこの野宿者支援の底点志向スタンスで実践していきたいと思う。

